

# アトリエ 琉游舎 だより 90号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/) 2020年10月21日発行  
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

むらさめの露もまだひぬ槇の葉に霧たちのぼる秋の夕暮れ  
 むらさめの道のわるさの下駄のはにはら立ちのぼる秋の夕暮れ

- このところ秋の俳句、短歌を2回続けてご紹介してきたので、秋の川柳で古典と言われるものがないかとネットサーフィン（今や死語らしいのです）を試みたのですが、見つかりませんでした。川柳は短い言葉の中に時代性や風刺・笑い・ペーススを盛り込むので、どうしても社会状況の制約を受け、時を超えた普遍性を持ちづらいジャンルなのではないでしょうか。狂歌になると少し事情が違おうようで、江戸時代のものを今でも気軽に読むことができます。
- 上段は「小倉百人一首87番」寂蓮法師の歌です。「にわか雨が通り過ぎていった後、まだその滴も乾いていない木の葉の茂りから霧が白く沸き上がっている秋の夕暮れ時である」コリーナでは珍しくない光景ですね。下段は『蜀山先生 狂歌百人一首』として大田南畝が詠んだ百人一首のパロディー集です。にわか雨で濡れた悪路で下駄の歯に小石や泥が引っかかって腹が立つという品も知性もない歌ですが自分の体験のように映像が目に浮かびます。

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ我が衣手は露にぬれつつ  
 秋の田のかりほの庵の歌がるたどりぞこなつて雪は降りつつ

- 上段は百人一首1番天智天皇の歌です。私が最初に暗記した歌で、この札だけは誰にもとられないようにと、身構えていた小学生時代を思い出します。ところが下の句で似たようなものがあるのです。「君がため春の野に出でて若菜つむ我が衣手に雪はふりつつ」15番光孝天皇の歌です。お手つきしやすい札です。蜀山先生も1番を取ろうと身構えていたのですが、誰かに取られたかお手つきしたか「とりぞこなつて雪は降りつつ」となった訳です。
- 狂歌については気の利いた解釈やうまくまとめることの意味はなさそうです。ばかばかしい歌に、下らないことだと笑い飛ばしてもらえれば結構です。テレビから聞こえてくるのは自称お笑い芸人の芸にもならないだべりか、画面に向かって怒りを投げつけるほかない、すごいすが一派のすかし話法だけ。こんな秋の夜長は、これぞパロディー、風刺、諧謔という狂歌の数々を読んで”腹立ちのぼる秋の夕暮れ“を笑い飛ばすしかなさそうですね。

**写経会**

11月1日(日)  
13時半から

**詩話会**

11月14日(土)  
13時半から

**読書会 13時半から**

10月27日(火) お釈迦様の真理の言葉「ダンマパダ」  
11月10日(火) 中途でも参加出来る易しい内容です

**映画会**

毎週木曜日  
13時半から

**居酒屋の会**

10月25日(日)  
16時半から

10/29	13時半	断崖 (99分)	ヒッチコック監督。ケーリー・グラント主演。夫に疑念を抱き始めた妻、不信任は日々増していき、夫に殺される被害妄想に取りつかれるようになってしまう。
11/5	13時半	大いなる別れ (100分)	ハンフリー・ボガード主演。親友ジョニーが殺され彼の過去を調査していたマードックは、彼が殺人罪で告発されていたことを知った。事件に巻き込まれる男を描くハードボイルド映画
11/12	13時半	白い恐怖 (111分)	ヒッチコック監督。イングリット・バーグマン、グレコリー・ベック主演。奇癖を持つ医師がある医師の失踪事件に関わっていると思われる中、一人彼の無実を信じる女医。

11月19, 26, 12月3日の映画の内容は未定です。次回お知らせいたします。

生きものに寿命があるように言葉にも寿命があります。技術や習俗の変化でその言葉を使う意味がなくなれば、自ずとその言葉は消えて行きます。“私のマイブームは花金の銀ぶら。おききの店でイタ飯ナウとメル友に送る瞬間が最高のリア充です。”書いている私が恥ずかしくなるくらいの死語のオンパレード。ここには私の見立てで、8個の死語があります。30代以上はどれか2, 3個ずつくらいは分かるでしょう。花金や銀ぶらが分かる人は間違いなく50歳以上です。全部分かる人は流行に翻弄された毎日を過ごしてきたか、軽薄ないわゆる業界人に違いありません。これらの言葉は同世代だけに通用した行動や感情表現であり、共有ができない集団や世代にはちんぷんかんぷん注1なはず。一方、道具などが変貌を遂げてその道具と一緒に消え去った言葉もあります。「ダビング、テレホンカード」「巻き戻し、ダイヤルを回す」などです。いずれも社会がその言葉を必要としたから生れ、必要としなくなったときに消え去った死語たちです。

ここ数年“台風一過の秋晴れ“という言葉に実感が伴わなくなってきました。最近の台風はぐずついた曇天や雨を残したまま、一人風と供に去って行ってしまいうように、空が抜けるような清々しい晴天を連れて来ることがとんとなくなりました。かつての台風は雨と湿気と塵・埃をまとめて持ち去り、晴天と乾燥したきれいな空気をもたらす天空の大掃除をしてくれました。台風は災害ですので、その存在を擁護するわけではありませんが、“台風一過の秋晴れ“という肯定的な言葉が実感として感じられなくなっている現在、今の気象状況が10年も続けば、この言葉は死語となり、台風がただの災害になってしまうのではという危惧があります。もしそれが現実となれば、ここに「同世代同集団だけに通用した言葉」「道具の変革によって生滅した言葉」の二つの死語のカテゴリーに「自然によって無用化された言葉」が加わることとなるのでしょうか。

死語は死んだ言葉、つまりそこに名づけられた現象や存在や感情が意味を持たなくなったとすることです。ではその反対の生きた言葉とは何でしょう。ここでは仮にそれを「生語(しょうご)」と名づけます。「無益な語句を千たび語るよりも、聞いて心の静まる有益な語句を一つ聞くほうがすぐれている。」注2お釈迦様が語った真理の言葉の一偈です。お釈迦様の言葉は仏教の教えに沿って受持しなければただの人生訓に墮してしまいます。「この道より我を生かす道はなし、この道を行く」「あたらしい門出をする者には新しい道がひらける」日本を代表する二人の処世指南者の言葉から無作為に書き出してみました。お釈迦様が語る言葉と一見区別がつかいませんね。しかしお釈迦様の語る「道」は、教え(法灯明)が指し示すところなのです。「行く」はその道を自ら行い続けることです。それはありのままに観る智慧(般若)で自ら道を照らし(自灯明)続けることで可能となることです。ここに引用した「無益な語句」は人間の欲や執着から発せられた言葉です。「有益な語句」はありのままに観る智慧と行いから発せられた言葉です。だから「聞いて心の静まる」言葉なのです。これが「生語」です。前者の「無益な語句」は言うまでもなく「死語」です。

私が造語した「生語」は仏教の伝統的な術語に従えば「真言(しんごん)」ということになるのでしょうか。しかし「真言」は「たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである」注3というお釈迦様の真の言葉に従えば死語です。秘密の呪文の中にこそ真実があるという「真言」は行いとありのままに観ることを否定しているから死語なのです。世界はありのままに私たちの前にあります。それをありのままに観ようとも行おうともしないで、見えない秘密の世界の中に「真言」があり、その「真言」は意味不明の呪文の中にある。と言われても、私はそれをお釈迦様の教えと認めることはできません。お釈迦様の言葉を都合の良いように解釈し続けてきた自称釈迦弟子たちの辿り着いた先は、死語の墓場です。そこには生きた教えはありません。「行い」がないからです。呪文を唱え加持祈禱を行うことが「行い」だと言うのであれば、それは宗教ではなくおまじないの範疇だと思うのですが如何でしょうか。

言葉は流行や技術変革の中で存在する限り、死語となっても笑い話や郷愁で済まされるでしょう。また自然の力に死を宣告された言葉は人智の及ばないことと諦めるしかありません。一番厄介な言葉は実践や感情のない言葉です。そこに行いと智慧はありません。言葉にほんの少しでも感情や行為の裏付けなどの身体の働きかけを感じ取ることができれば、私たちはその言葉とコミュニケーションができます。しかし智慧と行いのない言葉は身体のない言葉です。つまりゾンビが語る「死語」です。本来、心や肉体機能に基づかない言葉は虚空をさまようばかりで聞き手である私たちの身体に突き刺さることはないはずです。しかしゾンビが語る死語は、論点すり替えの話法(ご飯論法)や反復刷り込み論法で生きた身体が語る言葉「生語」と思い込ませる奸計があります。日々の喜怒哀楽の中で語られる言葉はその人にとっての真の言葉であり身体が語る「生語」です。死語に丸め込まれないためには、私たち自身が生語を語り続けなければならないのです。

ゾンビが語る最近の死語例を二つ挙げます。「想定外」と「適切に対応する」です。翻訳すると「私に責任はない」「何もする気はありません」という意味。「次は想定してやってくれるはず」や「適切な対応とは有り難い」などと期待や感謝をしたあなたはすでに死語に取り憑かれています。「適切に判断する」と言うのもありますね。これは「俺のやることにケチをつけるな!」という意味です。数え上げれば尽きないほど今、日本語はゾンビに操られ次々と死に絶えています。早く死語を大掃除して台風 琉游舎: 戸井 出琉・恭子 一過の秋晴れのような生きた日本語を取り戻さないと、私たち日本の言 お問い合わせ先: 0287-53-7848 08033508152 葉・文化・人が生きた屍と化す日はそう遠い将来ではなくなるでしょう。 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850